

特集

2号にひきつづき、今回もまた理事の方々にご挨拶をいただきました。

理事あいさつ -PART2-



成木 弘子
 (日本赤十字看護大学)
 「実践できるヘルスプロモーションの開発を！」

ヘルスプロモーション学会がやっと産声をあげました。ヘルス・プロモーションは理念からスタートしたために、実際の展開では戸惑いや課題が多い現状。その状況を突破し、実際の展開方法を開発する役割をこの学会に期待しています。個人的には、政策から始めるような大きな取り組みではなく、身近なコミュニティを再生することを通じた活動方法を模索しています。小さなアイデアや活動も大切につむいで欲しいと願っております。



脇谷 のりこ
 (フリーアナウンサー)

去年から90歳以上の元気な方を紹介するラジオ番組「吼えろ！90歳」を担当しています。皆さんのお話しを取材する度に「幸せ」とは？真の意味の健康とは？..を考えさせられます。

これがヘルスプロモーションなんだと感じました。医学のことは全く分からない私がこの会に参加したいと思ったのは島内先生のおっしゃる「愛」です。メディアを通してたくさんの幸せの笑顔を届け、自分なりにできる地域活動を今後も続けていきたいと思っています。



廣田 匡克
 (和く話く輪^{ワカハナ})

健康文化都市、それは「自分達が生活しているまちが大好きと思える環境」であると思います。そのためにまずは、地元を知る必要があると考えて市内の名所旧跡、景観をその土地の人や有識者と一緒にウォーキングしながら自分達の足と目で確認し、健康文化マップの作成に取り組んでいます。日々の生活が変わった実感がなくても人々の心身が少しずつ良くなっていくようなまちづくりを目指しています。社会の最小単位である家庭から始まり向三軒両隣の井戸端会議、町内会、各種団体、サークル等で健

康文化、環境等について「和やかな話し合いの輪」を広げたいと思います。



山本 千華
 (株式会社山本産業 温室事業部)
 食は生命の源。その食を得るため、日本人は農耕を通じて互いに助け合い、支えあってきました。ところが現在日本の食料自給率は30%をきる状態。国民の健康を支える日本の農業が立ち直るためには単なる生産量の増大だけでなく、そこにあったコミュニティの再生も重大な課題となってくると感じます。順天堂大学を卒業後、環境や農業分野に携わってまいりましたが幾度となくヘルスプロモーションの考え方へ立ち戻りました。この度学会へ参画させていただくことで、より積極的に健康な社会を創造する役割を果たしていければと考えております。



遠藤 圭子
 (東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校)

職種は歯科衛生士です。島内先生との出会いがあって、「ヘルスプロモーション」に出会いました。歯科の専門的スキルを活用、しかし専門馬鹿でない活動の展開、歯科を受診する方や住民、子供も大人も、男も女も、すべての人が自立して、快く暮らすために必要なことを考えて、実践することが現在の私の課題です。職業と関連したところでは、人々の保健行動や歯科的なニーズの調査、さらに歯科衛生士教育に関わる課題を整理することです。理事という大役を果たせるかどうかは疑問ですが、皆様の力を栄養にして、取り組んでいきたいと思っています。よろしくをお願いします。



松野 朝之
 (沖縄県宮古福祉保健所)

人口千人足らずの沖縄の孤島「粟国島」での医師としての勤務が私のヘルスプロモーションの原点です。医師一人ではどうい解決できない数々の住民の健康課題。多くの人の協力を得て解決に繋がったときの達成感が忘れられません。ヘルスプロモーションの概念を知ったときは、これだ、という思いでした。それが

らずっとヘルスプロモーションを心の拠り所に活動を続けてきましたし、これからも続けていきたいと思えます。



川越 博美

(聖路加看護大学)

私がヘルスプロモーションと本当の意味で出会ったのは、島内憲夫先生の聖路加看護大学での講義の中です。それに触発されて、日本看護協会から助成を受け、市民とともに「家で死ぬるまちづくり」事業を行いました。多くの市民と専門職、行政の方々との出会いをとうして、家で死ぬるまちづくりを越えたまちづくりができることを実感しました。私が所属する聖路加看護大学看護実践開発研究センターは、市民と実践者と研究者の協働による市民主導型健康生成を目指しています。人々とのつながり、地域とのつながり、世界とのつながりを夢みて、今できることを行っていきたいと思っています。Think globally, Act locally! です。どうぞ宜しくお願いいたします。



八幡 裕一郎

(秋田県衛生科学研究所)

普段、感染症発生情報を毎週作成しております。感染症発生情報とヘルスプロモーションとの接点はあるのであろうか?と考えるながら仕事をしていたところ、見つけました。麻疹ワクチン接種に関してです。麻疹以外にも風疹なども該当すると考えられます。これらの疾患のワクチン接種を向上させQOLの維持・向上へつながらせるような仕事をしています。よろしくお願ひ致します。



砂川 博史

(山口県萩健康福祉センター)

田舎では、少子高齢化と過疎が同時に進んでいます。地域が自壊している様に思われます。残った人たちの「自らの環境を、自分自身の手で整えていく」という意識と行動、それに従った地域の意思決定、そしてその過程に参画できる喜び等が、結局地域の魅力を発信すると思えます。つまり、ヘルスプロモーションの真髄でしょうか、地域の直接民主制が必要ではないかと・・・最近では考えて居ます。



小林 滋

(日本私立学校振興・共済事業団 東京臨海病院)

はじめまして。このたび日本ヘルスプロモーション学会に加えていただきました新参加者でございま

す。いまだ、ヘルスプロモーションの何たるかも分からないでおりますが、島内先生の強い指導力のもと僅かでもお手伝いのできるのであればと思ひ入会させていただきました次第です。現在、私は2年前に江戸川区に初めてできた総合病院(東京臨海病院)で外科医をしております。また、週に1回某企業で産業医をしております。どうぞよろしくお願ひいたします。



佐藤 京子

(宮崎医科大学医学部看護学科)

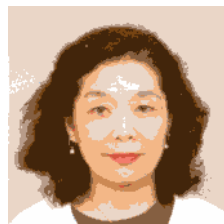
ヘルスプロモーションの授業を島内先生にお願いしたのがご縁で、この学会の理事をお引き受けすることになりました。先生の“愛のメッセージ”の講義も高村先生の実践例の紹介も大好評で、第1回学術大会には学生が2名参加しました。「健康なまちづくり」には住民と行政の接点にいる保健師の役割はとても重要です。新規施策や事業の洪水の中にある保健師達が押し流されないように、自助・互助・公助、そして協助をどう行ったらよいか、が私のテーマです。



林 二士

(NPO 法人 心身障害者生活支援センター ダンデライオン)

現在「私(わたくし)ヘルスプロモーション」街道ばく進中!! 「心身障害児・者の健康づくり」に力を入れています。自分の「思いをかたちに」ということで上記のような団体を立ち上げました。目的は「心身障害をもつ人びととその家族のQOLを高め、地域で生活する支援をする」というもの。この学会で共鳴しあった皆さんと一緒にヘルスプロモーションの心意気を伝えられたら幸いです。



白田 千代子

(中野区北部保健福祉センター)

地域で口腔を切り口に、乳幼児から高齢者を対象に保健活動をしています。健康なまちづくりをめざして、口腔保健の担い手に何ができるのか疑問におもわれるでしょう。毎日何気なく使っている口腔をのぞくと、それぞれの人の生き様をありのままに読み取る事ができます。地域の口腔保健向上を推進していくためには、そこに暮らす人々と一緒にそのまちのあり方を検討していくことにつながります。地域の人々と目標に向かって、一步一步邁進しています。

理事の皆さんどうもありがとうございました。現在、会長1名、副会長2名、常任理事10名、理事24名、監事2名(久保勇人氏;中国ヘルスケアシステム株式会社 西田美佐氏;国が国際医療センター)によって運営されています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

特別寄稿

会員の湯浅資之先生（国立国際医療センター）が JICA のブラジルプロジェクト滞在中に現地レポートをお送りくださいました。

クラーク博士に学ぶ

湯浅 資之

Dr. Motoyuki YUASA

東北ブラジル健康なまちづくりプロジェクト・チームリーダー

北海道庁赤レンガに行くと、馬にまたがった W.S.クラーク博士が、彼を見送る学生たちに「Boys, be ambitious (少年よ、大志を抱け)」と叫んでいる光景を描いた大きな絵画を見ることができます。この有名な言葉は実はこれで終わらず、そのあとに「金や立身出世のために野望を抱くのではない。人としてなすべきことのために大志を抱くのである」と言うくだりが、その絵画には書き込まれています。このクダリは、直接クラーク博士に接した大島正健から聞き伝えた矢内原忠雄（戦時中非戦論を唱え東大を追われ、戦後東大総長に返り咲く）が追加したものだといわれています。恐らく、クラーク自身はそこまで言わなかったでしょう。

クラークはアメリカ南北戦争に従軍した後、洋上大学、鉱山運営など様々な事業に着手しては失敗を繰り返し、巨額な負債を抱えながら失意のうちに他界した人でした。当時のアメリカはゴールド・ラッシュに沸きかえっていたときでもあり、クラーク個人は、当時のアメリカには何処にでもいた文字通り ambitious な野心家でした。そんなクラークが発した人間臭い言葉に、矢内原のみならず、この言葉を聞いた当時の青年たちの誰もが、文字通りの「野心を持って」とは捉えず、なぜ崇高な理念に解釈し直したのでしょうか。クラークの真意が何処にあったかよりも、私はむしろ、それを受け止めた日本人の側に関心があります。

明治の初め、札幌農学校の初代教頭に迎えられたクラーク博士は、先進地アメリカから途上国日本に派遣された、今で言う開発専門家でした。しかも、札幌滞在はわずか9か月でしたから、JICAの規定では短期専門家です。彼の TOR には、アメリカの近代農業、酪農の技術移転だけでなく、札幌農学校の運営指導も入っていました。当時、農学校の学生は勉強もせず、風紀が乱れていたといえます。そのことに頭を痛めていた開拓使（農学校の運営責任を持つ）は、学生規律を強化することでこの問題に対処しようとしていました。そこで、黒田清隆開拓使長官（兼農学校校長、のち総理大臣）は規律強化をクラークに託したのです。しかし、クラークは全ての規律を破棄し、一言「Begentleman (紳士たれ)」だけをその規律としてしまったのです。あわてた黒田は「それでも改めない者がいたら、どうする」と聞いただと、クラークはまた一言「退学のみ」とボソリと言いました。

この問答を聞いた学生は大いに喜び、人が変わったように勉強するようになったそうです。のち、前述の大島は「博士の言葉に、学生皆、自尊心大いに起こりたり」と記しています。クラーク博士の学生に対する常に変わらぬ姿勢は、すべてこの「紳士たれ」と言う言葉に込められていたように思います。学生たちの考え方、気概を専ら専門家クラークの姿勢が、カウンターパートでもあった学生の主体性、創造性を育み、近代日本の開拓の礎になったのではないのでしょうか。そして、人間クラークの発した「Be ambitious」の言葉さえも、より崇高な意味合いをもたらす価値へと昇華させてしまったように思います。

話は変わりますが、昨年、JICA 主催の参加型組織開発セミナーに出席したときのことで。講師は、様々な途上国の現場で開発に携わってきた Dr. Malcolm J. Odell というアメリカ人専門家でした。彼は1960年代初頭にネパールに入り、やがて活動の場所をアフリカへ移し、30年以上経った1990年代半ば再びネパールに戻りました。彼は講演で、「ネパールに戻ってきて一番に驚いたことは、ネパールの人々が自尊心を失ってしまったことだ」と言いました。彼によれば、昔は貧しくとも、ネパールの人々は自らの文化や社会に対する誇りを持っていた。それが、30年経って戻ってみると、『物をくれ』と言う乞食のような姿に変貌していたと言うのです。そこで、自尊心を無視した開発の乱入が原因であると彼は考え、自尊心を取り戻すために、問題をほじくり出すのではなく、「この村で成功してきたことは何ですか」を話し合わせる方法（Appreciative Planning and Action）を考案したのだと言うのです。今やこの APA 法は、世界銀行にも採用されるまでとなりました。ここでも、自尊心が重要な意味を持っているようです。

ところで、アメリカの著名な開発経済学者 M.トダロは、彼の著書「開発経済学」（アメリカにおける開発学の教科書的存在）の中で、開発における三つの中核的価値基準というものを上げています。彼によると、開発のヴィジョンとは、基本的ニーズを手に入れること、自尊心を持つこと、選択の幅を広げること、の三つの価値にあると考えているようです。ここにも、自尊心という言葉が登場しています。

思うままに筆を動かしてきましたが、とかく日々の国際協力の現場で忘れがちですが、先方の考え方、気概に敬意を払うこと、そして先方の自尊心を尊ぶことは、とても大事なことであると思います。専門家として自分の経験や技術を伝えるにしても、カウンターパートの自尊心を損なわないように配慮することが、長い目で見れば効果を全くちがうものに仕立て上げるのかもしれない、とクラーク博士を思いながら考えさせられました。明日からでも「あなたの考えは正しい」と我がカウンターパートに言うようにしようかな・・・。

本稿へのご意見・ご感想・湯浅先生への応援メッセージ、お待ちしております！ Emailto: jimukyoku@jshp.net

トピックス

ヘルスプロモーション
グlossary

Vol.3

5. ソーシャル・サポート (Social support): コミュニティの中で個人やグループに有効な援助のことで、好ましくないライフイベントや生活状態を防ぐための手立てを提供し、QOL を高めるために積極的な資源を提供することができるのである。(WHO 1998)

6. ソーシャル・ネットワーク (Social network): 健康のためのソーシャル・サポートへのアクセスや資源動員を提供している個々人の関係や他へのリンクである。(WHO 1998)

「会員の声」を募集しています！

身の回りの活動、日頃思うこと、ニューズレターに対するご意見、学会に対するご意見等、何でも結構です。

jimukyoku@jshp.net

編集後記 新年度がスタートしました。会員の皆さんの環境も少しずつ変化しているのではないかと思います。新しい部署で・新しい人へ・新たに唱道「ADVOCATE」戦略を立ててみてはいかがでしょう？（助友）

本印刷物の無断転載を禁じます。